

伊万里—唐津間巡検一人歩き

(とくに杵島層群の見学)

鹿町工業高等学校 西 村 進

はじめに

県北の鹿町に居を構えて、不十分ながら、佐世保層群をみてきたので、その下部に相当する杵島層群、できれば相知層群を歩きたいとかねて考えていた。去る11月23日、12月22日、同月25日の3回に亘って巡検した。出来ればかつて日曜地質巡検でみて来た西彼夫瀬戸地区、有田地区との、それぞれの関連、対比も確かめたかった。

一人歩きは、話し相手、相談する人、指導してくれる人もいない。自己のペースで歩けるようであるが、骨の折れるものである。手許の若干の資料を頼りに歩いたが、結果として見落とし、化石採集不十分で、お粗末であるが、何かの参考にもして戴けば幸いです。

11月23日(日)(5万分の1 唐津・伊万里)

江迎より伊万里駅まで汽車。駅前より西肥バス伊万里営業所発福島行きで、約30分、干潟入口停留所で下車する。長崎県側の福島に架橋されて陸路の便がよくなったが、道路、工事中の舗装不十分な道を福島、唐津行きの車が砂煙をまき上げるなかを歩く。

バス停より煤屋方面に向う約500mの峠の切通しに露出した相浦層のシルト薄層をはさむ下部泥炭層は、足をふみ込めば崩れ落ち

るほどに風化して、化石の発見に努めたがむなしく採集できなかつた。此処より60m程で道路は大きく西側にカーブし、断層に起因すると考えられる谷の先端は海岸に向かって湿地が開ける。

マップ上の福田部落の炭鉱は土地の人の話だと昭和22年頃、閉山したとのことである。地図は昭和32年印刷発行で、昭和28年応急修正となっているので、真偽の程は不明で疑問を残した。相浦層上部より掘進し、同層下部炭層を採炭したものと考えられる。斜坑の坑口のあとのみが残っている。

福田一煤屋間

福田部落入口で地層は暗灰色シルト岩と粗粒砂岩の細互層となり、その直上に次第に砂岩が優勢となる中に薄い泥岩をはさむ岩層と変化する。相浦層上部である。廢坑あと40~50m前方道路沿いに厚い砂岩の連続を確かめることはできなかつたが、相浦層上部層のシルトと砂岩の薄い互層の下部を認めた。

煤屋バス停道路沿いの砂岩は風化して黄白色となり、新鮮な時は暗緑色をするかをみたいものである。煤屋部落地先の海岸は、かつて埋立があつたのか、工事が中断し、石炭産業の衰微を考え一抹の淋しさを感じた。それと対照に福島を遠望できる此の地より、佐賀県波多津と、本県福島側に架る橋梁は近代的

で辺境の地に近代化の息吹を思わせる。

馬蛤瀉一畑津

まてがた

馬蛤瀉部落民家の石垣は、暗青色一灰青色の凝灰岩に一見みえる堅い砂岩を多くの家で利用している。この石材を提供した石切場が近くにあることを期待して、露頭をみつけ出したいものと注意して歩いたが、この附近では発見することができなかった。馬蛤瀉部落の露頭は黄白色の炭質頁岩を薄くはさむ1 m余の砂岩の層がみられ、砂岩は畑津方面に厚くなっていた。畑津の田島宮附近の化石産出を期待し、神社裏の人家及び中学生に聞いても何の手がかりもなかったが、神社裏の露頭及び農協倉庫土手より二枚貝化石を発見したが風化が進み、個体数も少なく十分な採集ができなかった。記録によると *Chlamys ashiyaensis* Nagao, *Veneriocardia* sp. *Phaxas* sp. である。

12月22日(日) (5万分の1 唐津)

伊万里より畑津三叉路内野田バス停車、小雪が吹く中を行合野方面に歩く。前回に充分にみるができなかった畑津砂岩層を下車地にみた。粗粒砂岩である。この下部の細粒砂岩には化石をふくむ。田島宮を過ぎ畑津部落に入る。この附近で畑津砂岩層・駒鳴砂岩層の上下限を識別確認したいと気をつけて追ったつもりだが、とうとうなすことができなかった。三岳山麓直下の道路沿い及び川の中で火成岩にであらう。道路沿いの採石場跡では、直径約30 cmの柱状節理をなす玄武岩が見られた。暗黒色の普通輝石カンラン石玄武岩というが、ルーペ下では鉱物を判別することは無理のようである。

三岳東方谷の波多津採石場入口よりこの岩

体はよく柱状節理が発達し、大きさも下部より増し、盛んにトラックが石材を運搬している。

畑津を過ぎる頃より道に迫る崖となる。この三岳附近は三岳地すべり地区の指定をうけ、高札によると道路をはさんで南側斜面が北に迫っている。畑津一中山の間、井野尾三叉路近くに、駒鳴砂岩層下底の約1 mには礫岩が発達し、珪質緑色岩の小円礫(径10 mm程)を含み、その直上に薄層の頁岩をはさむ砂岩が重なる。これより行合野砂岩層に入る。中山を過ぎる頃より造崖性の厚砂岩があり、所々に砂岩の採石場跡がある。津留を過ぎると谷は深く、一気に深山に入った思いがする。此の道は歩く人もなく、時折、唐津を往復する自動車を通り、杉の林が連なり、静かな山道である。この近くで初めてフレッシュな暗緑色砂岩に長石の白色斑点を混えた砂岩が目にかかる。馬蛤瀉民家の石垣の石材がここから持込まれるにしては、少し遠い感じもする。主屋より津留部落の入口に断層と思われ層の傾斜がみられ、恐らくは川に沿った破碎帯のようである。津留を過ぎ行合野までの切立った崖に圧迫感を覚え、その厚い砂岩を眺めて行く。此の間淡緑色の粗粒砂岩が連続し、恵木方面入口及びその谷の奥でも石切場が開かれている。

行合野一稗田間

行合野を過ぎ道は波多川沿いに国道202号線となる。徳須恵部落の見通せる沖積層入口まで川沿西岸は佐里砂岩層の分布地域である。この両岸で本層下部砂岩の採石が盛んである。行合野三叉路停留所より約100 m附近の採石場跡に厚さ10 cmに保存の悪い化石密集帯がある。資料として採取はしたが、同

定資料としては不十分のようである。此処より東方400mの道路沿いに硅質、砂質の小円礫を含む砂岩があるが、化石帯の下部である。この近くの採石場入口の民家裏に、最近堀出したと思われる新しい化石の露頭をみる。相当硬質で採取困難ではあるが、資料として充分で、多くの化石を採取した。今日迄同定していないが記録によると、*Chlamys ashiyaensis* Nagao, *Crassatellites yabei* Nagao, *Pitar? matsumotoi* Nagao, *Glycymeris* sp, *Shiphonalia supragranulata* Nagao が産出している。徳須恵まで歩き、バス停で佐賀の先生より声をかけられた。理科研究会に一回参加したが地学の方は判らないが、どうしたものかとのことだったが、佐賀県近くで本県日曜巡検があるときは参加をすすめては来たが、便りが来ることを楽しみに待ちたい。

徳須恵より西唐津大島までバスで閃緑岩の分布予察の心組みで行ったが、夜になってしまった。

12月25日(水) (冬休み)

(5万分の1 唐津)

汽車で山本駅下車、直に志石、大杉に向う。此の間は風化が進んだ、花崗閃緑岩で、小規模ながら崖くずれを起した所もあり、固結岩体らしいものは見当たらない。この風化石材は路面に砂利代りにしきつめて利用している。大杉北方300mで、ここを通る畑津断層によって閃緑岩は巖木層と接し、一見して岩相の変化がみられる。大杉部落の水田等はこの風化閃緑岩をもって埋立て整地したので、水引きがよいと、部落の老人は語ってくれた。

断層近くの露頭下部に風化しているが、厚さ30~40cmの化石の密集層がある。採集した化石はカキ類のようで、この化石は松島層群中、中戸累層第三化石層から出るものに当ると言われる。大杉—上大杉間でこの層に当る化石を再採集したいと思い、住民の方★に尋ね、或いは層の追跡をしたが不充分だったのか探し当てることができなかつたのは残念である。

徳須恵部落を南にみて、竹有三叉路で巖木層上部に当る芳の谷層下部より、凝灰岩層を確かめた。その後引き返し、山彦、下平野、上平野に向う。山彦—下平野の峠切通し崖に炭層の露頭をみる。峠より約500m下平野寄り道路沿いに、風化した砂岩に玉葱状の風化の連続が水平方向に並んだ紋様は美しいものである。又上平野小学校分校北方山麓には、大がかりな採石場があり、盛んに稼行している。

むすび

以上3日間の一人巡検を省みて、資料及び準備の不十分、未熟でもあり、此の地方の地質的知識を充分消化することができず、まして、新しい知見を出すこともできずに終わった。とぼしいながら野帳、サンプルの整理、薄片作製、検鏡、化石の採取、同定、或いは問題点の発見、解決と自分の微力と努力の不足を痛感した。この道に励み同好の士、先生方と互いに手を取り合って、学術の先端に到達し、更に一步前進させるためには、日常私等に適合した課題を自ら探し解決してゆきたいものである。諸先輩の御指導を切に望む。

(44年1月9日記)

(昭和44年1月14日受理)